

蝶の博物詩

生態27

求愛4



モンキアゲハ(後方から雄が迫る)
(1994年10月2日 奄美大島)

photo by

Nishiyama



オオゴマダラのくちづけ
(2003年2月11日 石垣島)

蝶の博物詩

生態27

求愛4

戦争末期、東京、横浜が焦土と化し、敗戦が決定的となったころ、私は肺浸潤(肺結核の初期)ということで、陸軍気象部での動員を解除された。前年11月に、東京郊外の杉並から鎌倉に疎開、転居していたが、欣喜雀躍、昼は市の内外を自転車で走り回り、夜は鎌倉に住む文士が蔵書を持ち寄ってつくった鎌倉文庫という貸本屋から借りた小説を読みふけた。明日の命のわからないときに読む文学書は深く心にしみた。

かつての鎌倉には横須賀鎮守府の海軍軍人と、結核の保養、別荘の人々が住んでいた。しかし戦争末期にはさらに山間、僻地に疎開したので、街にはほとんど人影がなく、道端に放置されたピアノや家財道具も散見された。私たちは千坪を越す敷地の中に畠をつくって自給自足の生活をしていた。

街を囲む山は高くないが、古刹を探して谷(やと)に入ると木が涼しく繁る。その1つ、妙本寺の山門に近く、林間を縫うようにかなりの速さで飛ぶ黒いアゲハをみた。後翅に白い斑が垣間みられる。モンキアゲハだ。東京近郊ではみたことがない憧れの1種である。10分ほど経って、もう1頭のモンキアゲハが同じコースを飛んできた。同じ個体が別の仲間かわからないが、この一定のコースを蝶道という。環境や気温、日照によって多少異なるが、蝶道を通るのは雄だけである。おそらく雌を探索する配偶行動といえよう。私は妙本寺参道の石段に腰をおろし、蝶道を飛ぶ蝶を何時間も待った。超低空を飛ぶ米艦載機グラマン・ヘルキャットはまったく気にならなかった。

半世紀後、私は奄美大島にいた。ここでは道端のハイビスカスの花を中心にして、求愛するモンキアゲハが随所にみられた。気の合ったカップルはもつれあって碧い空高く飛び去り、人目につかない場所に行くに違いない。これに対してオオゴマダラやスジグロカバマダラなどの雌は雄の求愛をすぐに受け入れるようにみえる。

配偶行動にかかわる性フェロモンの存在はFabreの観察で予想されていたが、カイコガでその結晶化に成功し、構造決定したのはドイツのButenandtらであった。1959年、ちょうど私がドイツ留学中の出来事で、同じ大学病院の内科医が得意顔に話してくれた。Butenandtはエストロジェンとアンドロステロンの結晶分離の業績により、1939年36歳の若さでノーベル賞を授与された。しかし当時ヒトラーの命令で辞退することになったという有名な話がある(戦後1949年受賞)。

Butenandtがウマの性ホルモンから昆虫(カイコガ)の性フェロモンに仕事の興味を移したのは、彼が昆虫少年だったからに違いない。彼が単離、結晶化したカイコガの性フェロモンはボンピコールと呼ばれるが、その抽出のために日本とイタリアから50万匹のカイコの繭を買い求めた。戦争中は潜水艦で運ばれたという楽しい噂もある。抽出された結晶はわずか12 mgにすぎなかったが、それはたいへんな努力であった。現在、昆虫性フェロモンの測定には1匹の雌で十分であり、1,500種以上が明らかとなり、データベースに登録されている。

西山茂夫